

第二百二十七話 忘れられた軍神（2）

（副題：我が将兵の敢闘、此処にあり！（6））

イ 松尾敬宇中佐他（軍神とはされなかったが、・・・）（第三十話関連）

シドニー湾攻撃に特殊潜航艇艇長として参加した松尾敬宇大尉は、魚雷発射管の故障により攻撃が叶わず、艇を敵艦へ体当たりさせることで魚雷を爆発させようと図ったが、これも失敗。部下とともに自決した。死後2階級特進し、豪海軍より丁重に葬儀が行われた。松尾大尉以下の戦死は当時の日本で美談視されていたが、1942年10月5日、遺骨が日本に送還されてきた際に、海軍は報道各社に「特殊潜航艇4勇士は軍神扱いせざることを申し入れた。これは、真珠湾攻撃の際に特殊潜航艇で戦死した「九軍神」の希少価値を下落させたくない、との配慮とみられている。

ウ 加藤建夫少将

大東亜戦争中のベンガル湾上空におけるイギリス空軍機との空戦で被弾し、1942年に戦死した。軍神とされた理由としては、加藤は日本軍史上最多の7枚の感状（個人感状・部隊感状合わせ）を受賞の古参の戦闘機操縦者であり、何よりも高潔ながらも愛嬌があり、誰からも信頼されるその人柄の良さ、軍人として優れた指揮官であった事からとされる。また、加藤はその名を配した加藤隼戦闘隊として有名な帝国陸軍飛行第64戦隊隊長であり、後に加藤や部下の戦隊隊員達の活躍や最期を描いた戦争映画「加藤隼戦闘隊」が作られ、同隊の部隊歌も有名となった。



エ 関行男中佐

レイテ沖海戦(1944/10/23)において、神風特別攻撃隊・敷島隊隊長として指揮し、自らもアメリカ艦船に突入し戦死した。特攻隊の戦死者第1号とされる。死後は軍神として畏敬の対象とされた。関大尉は、10月25日の4度目の出撃で、（単機若しくは僚機と共に）護衛空母セント・ローに突入し撃沈させた。

オ 山崎軍神部隊（1943/5/29）

米軍は、アリューシャン列島の奪回を目指して、1943/5/12、アッツ島上陸を開始した。アッツ島は、山崎保代陸軍大佐指揮下の日本陸軍が防衛していた。日本軍は反撃もまもなく、厳しい戦いを強いられた。大本営はアッツ島、キスカ島の確保を断念、5月20日、アッツ島の放棄と、キスカ島からの撤退を発令した。アッツ島守備隊二千数百名は、上陸したアメリカ軍と17日間におよぶ激しい戦闘の末、5月29日に玉砕した。

カ 国葬もて遇された山本五十六大将

1943/4/18、連合艦隊司令長官山本五十六大将は、搭乗機を撃墜され戦死した。（海軍甲事件）6月5日、山本元師国葬を日比谷公園で挙行された。皇族・華族ではない平民が国葬にされたのは当時、山本だけだった。

3 軍神の母訪問記（「軍神」281pから引用）

『老翁の傍らに背を丸めてポツネンと座ってをられる母堂はにじみ出てくる涙を笑ひにまぎらさうとしてか、唇の端にかすかに笑を見せられたが、その笑いは明らかにひきつって、記者は胸をかきむしられる思ひであった。泣いてはならない、直治はもう私の子ではない、私はお前の戦死をよろこぼう—母堂の心をさういう風に付度するのは記者のいたづらな思ひ過ぎであらうか』

4 建立された軍神像のその後の取り扱いはあんまりだ。その豹変ぶりは異常だ。

* 全ての国民が共感し、涙した軍神。彼等の想いと生き様を再確認すべきだ。

（第二百二十七話 了）